地域生活を支える
社会福祉法人

第154回

大成会【千葉県成田市】の試み

障害者支援から貧困問題まで 地元密着で多彩な領域に活動を広げる

千葉県成田市において、60年を超える歴史をもつ大成会。これまで培ってきた障害福祉分野の専門性を活かして、貧困問題や自閉症の啓発活動など、地域に密着した多彩な活動にその領域を広げている。

障害のある子どもへの支援が大成会の活動の原点。
専門性を活かして、すべての方の笑顔を守るため、多彩な活動を行っている。

調理実習の様子。入所者の将来の自立をめざして、
さまざまな実習を取り入れている。

障害者の就労支援も重要な活動のひとつ。

1 自閉症を理解していただくための10年にわたる活動

大成会では、その長年にわたる事業内容から得た貴重なノウハウを地域に役立てるため、さまざまな活動を継続して行っている。

例えば、「自閉症基礎研修」と名付けられた講座の開催もそのひとつ。成田市の商工会議所のホールなど、誰でも気軽に出かけられる会場を借りて開催している。参加費は無料で行っている勉強会である。朝の9時半から夕方の5時まで丸一日をかけて自閉症の基礎を学ぶことができる。

講座には自閉症の理解を深めるだけでなく、
大成会の活動を地域の方がたに知ってもらう目的もある。

「大成会は、長年自閉症の方たちやその家族とかかわってきました。そのなかで、周りの方から誤解されてしまったり、理解が得られずに悲しい思いをされたという相談を受けることが多くありました。職員から、自分たちのノウハウを使って、そういった状況を変えていけないかという提案があり、始めたものです。

いざ、内容を検討し始めると、課題がたくさんありました。自閉症を基礎から深く理解してもらおうとすると、短い時間では足りません。一方で、内容を詰め込み、長時間や複数日の連続講座としてしまうと、参加のハードルが上がり、参加者が限られてしまいます。そこで、法人内で何度も検討をしながら、まずは〝本当に分かってほしいところ〟をまとめる作業に時間をかけました。また、参加者の希望にあわせて学んでいただけるよう、同じ内容の講座を毎年度3回開催することにしています。これまでに10年間続け、通算30回を超えました」と理事長の野村哲也さんは話す。

講座をスタートした10年前は、他の障害者支援施設の関係者や家族が多かった。最近では、保育所や幼稚園、小学校教師などの参加が増えている。

「この講座を行うことの意義は、自閉症を理解してもらうという目的だけではなく、大成会の活動や思い、大成会で働いている職員の姿を地域に向けて発信できることにもあると思っています。講座は自閉症に特化して開催していますが、障害のこと、大成会のことなど、これまで以上に自分たちから外に向けて発信していく機会が必要だと考えています。」と、野村さんは講座の意義を話す。

自閉症基礎研修講座の様子。

2 2つの相談窓口は、入り口を広く、ニーズキャッチがしやすいように

大成会では、現在、相談窓口として「ほっとすまいるセンター」と、「暮らしサポート成田」を設けている。「ほっとすまいるセンター」は、日常生活自立支援事業として受託している福祉サービス利用援助のための相談窓口、「暮らしサポート成田」は、生活困窮者向けの事業として受託し、成田市社会福祉協議会と共同運営しているものである。

「暮らしサポート成田」の相談窓口。相談員が常駐している。

「事業としての目的は分かれていますが、利用案内や広報は〝まずはなんでも相談してください〟という姿勢で行っています。実際に受けている相談もさまざまです。窓口から対象を狭めては、キャッチできるニーズも限られてしまいますから、そういったことはなくしていきたいという思いがあります」と、法人本部長でほっとすまいるセンター管理者の髙柳さんは話す。

それぞれの相談窓口は、大成会の他施設や事業とは離れた、成田市保健福祉館、商工会館に設置している。相談に訪れる方にとって、通いやすく、相談しやすい場所にというねらいがある。

「ほっとすまいるセンターに寄せられるのは、〝ただ、不安を聞いてほしい〟という相談、具体的に解決したい生活課題等に関する相談など、さまざまです。まずは困っていることをていねいに聞きとり、状況や悩みにあう適切なサービスにつなげています。住まいに関する相談も多く、ご本人の希望を聞き取り、状況を整理しながら、住宅探しから契約までお手伝いするケースもあります。また、窓口に来ることが難しい場合には、ご本人の希望に沿って訪問相談も行っています。

ほっとすまいるセンターで相談を受けているなかで、生活困窮が背景にある内容が増えています。

大成会は、障害福祉事業での実践を長く積んできた法人ですが、生活困窮という課題を通じてもっと幅広く取り組めることはないかと考えるようになりました。そこで、立ち上げたのが、もうひとつの相談窓口「暮らしサポート成田」です。

相談窓口は2か所にしていますが、それぞれの窓口でどのような相談が持ち込まれても、『その問題は、この窓口が担当ではありません』といった対応でなく、お互いに密に連絡を取りながら、適切な支援につなげています」と、理事長の野村さんは相談窓口に関する思いを話された。

相談者に配慮し、落ち着いて話ができるよう空間を確保。

3 緊急性を要する方の生活、住まいを守る避難シェルターの運用

「暮らしサポート成田」を設置して約2年、窓口に緊急性を要する相談が入ることがある。今晩寝る場所がない、明日住む家がない、という相談がいくつも寄せられた。目の前の、緊急的な支援を必要とする方たちに対して法人としてできる取り組みを検討し、「緊急避難用シェルター」の運用を始めた。

シェルターは、大成会が経営している障害児向けの放課後児童等デイサービスセンターの空部屋（放課後児童等デイサービスセンターは1階、シェルターは2階）を使用している。

放課後児童等デイサービスセンターを行っている建物は、借家のため、使用目的等を持ち主に理解していただき、交渉のうえで改装を行った。シェルターを運用する2階部分へは、外階段から出入りできるようにし、放課後児童等デイサービスの利用者と異なる入口を確保した。シェルターは、バス、トイレ付の独立した住居空間を2部屋つくり、利用者が落ち着いて過ごせる環境を整えた。

取材の前日にも、相談窓口への相談から、シェルターを利用することになった方がいたそうだ。

「ちょうど昨日、シェルターに入られた方がいます。大成会の相談窓口にいらっしゃった際には、『住む場所も、お金もない』と話して、衰弱した状態でした。話を聞いていくと、結婚相手からDVを受け、家から逃げ出してきたそうです。身の危険を感じて飛び出したけれど、周囲には頼れる親類や知り合いもおらず、行くあてもないとおっしゃっていました。

家を出た後は、成田空港とビジネスホテルを行き来しながら、1週間過ごしていたようです。成田空港は夜間・早朝とフライトがありますから、常に開放されたスペースがあります。お金がなくても、かろうじて室内で過ごすことができる場所として、空港を思いついたのでしょう。その後、大成会の窓口を知って相談に来てくれたようです。シェルターを利用され始めたばかりですが、働く場所を探し、住む場所を確保できるよう支援していく予定です。

住まいや生活に困っていても、適切な支援にたどりついていない方も多いのではないかと思っています。背景もさまざまでしょうから、困っている方に支援が行き届くよう、ますます広報の工夫も必要です」と、理事長の野村さんは実態を話す。

さまざまな相談が寄せられる相談窓口から、地域にある支援ニーズをくみ取り、社会福祉法人としてできる役割を模索し、地域の多様な課題に積極的に対応し続けてきた大成会は、年々その活動領域を広げ、地域を支えている。

緊急で生活場所を必要とする方に対し、落ち着いて過ごせる個室を確保している。

職員の自発的な提案によってさらに広がる活動内容 4.

大成会で実施されている多彩な活動は、現場で働く職員から発案されたものが多い。

「私は、大成会に入職する前には全く別分野の一般企業で働いていました。社会福祉法人に入職してまず感じたのは、社会福祉の制度上の規制の多さでした。入職当時はすべて措置制度のなかで動いていましたから、簡単に活動を広げられないもどかしさがありました。働いている職員も、いつの間にか目の前の利用者や業務だけに集中し、地域を意識する機会が少なかったのではないかと感じます。

制度が変わり、また、大成会の職員の人事考課の仕組みを整えるなかで、少しずつ、「新しいことをやりたい」、「事業にはない、地域のニーズに応えたい」と言ってくれる職員も増えました。

社会福祉法人として、職員は担当している事業のことだけ知っていれば良い、では済まないと思っています。困りごとを相談されたら、自分が担当している業務ではなくても、適切な支援につなげられる。すべての職員にそのような意識をもってほしい。この考え方を浸透させることに努めてきました」と、理事長の野村さんは地域に根ざした活動を行うために必要なポイントを話す。

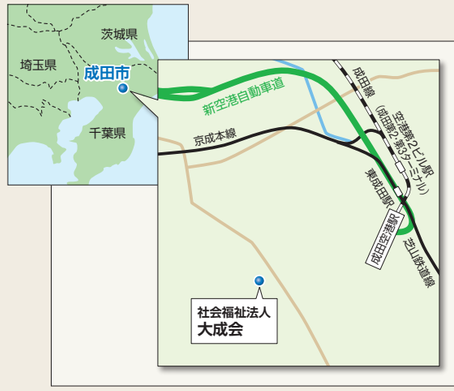
大成会では、多様な活動を展開し充実させるため、人材育成に力を入れている。例えば、職員研修のなかには、職員自身が考え、企画して学びあうものがある。職員が委員となっている研修委員会が、毎年5つ程度のテーマを決め、すべての職員が自身の関心に合わせたテーマの研修に参加することができる仕組みだ。職員が感じている課題や悩みとリンクさせた学びの場となっている。

また、平成28年度には、理事長自らが3か月間をかけてすべての職員との個人面談を行い、さまざまな意見を直接くみ上げる取り組みを始めた。個人面談では、日頃の業務や活動のなかで見つけた、新しい活動へのアイディアが数多く出されたそうだ。

「面談から、法人のなかだけではなく、広い視野で役割を考えている職員が増えたと感じることができました。地域に向けた自閉症基礎研修、相談窓口、シェルター等の実践が良い影響をもたらしているように思います。今後も、視野は広く、実践で培った力を活かして地域での活動を充実させていきたいです」と理事長の野村さんは今後の展望を話した。

職員研修での1コマ。
職員同士では活発に意見を出し合う。

講師を招いての職員研修の様子。



沿革と現状　大成会

【法人の概要】

■法 人 名
社会福祉法人 大成会

■本部住所
〒286-0122 千葉県成田市大清水206-1

■事業内容
障害児入所施設　障害児通所支援事業所
就労継続支援Ｂ型事業所　共同生活事業所
居宅介護ステーション　ほか

■理事長　野村 哲也

「社会福祉法人大成会」の沿革
地域のニーズに合わせ、事業を充実

昭和27年、千葉県成田市に開設された精神薄弱児施設「不二学園」が法人のルーツである。昭和31年に社会福祉法人大成会として法人認可を受け、地元に密着した活動を行ってきた。平成10年に通所授産施設「成田市のぞみの園」を成田市より受託したことを契機に、利用者や家族の希望、地域のニーズにあわせ、さらに事業の充実を図ってきた。

平成18年には、知的障害者を対象にしたグループホーム「みやしもホーム」の運営を開始。現在、大成会の運営するグループホームは市内に4か所で、21人の方が生活している。

「不二学園は障害児の入所施設という位置づけですから、原則は18歳で卒園となります。しかし、卒園後に家庭に戻る方は非常に少なく、新しい生活の場を探すことに奔走しています。その方にあう生活の場所が見つかると良いのですが、なかなか見つからないことも多いです。卒園した方たちが地域で生活していくためにできることはないかと考え、アパートを法人で借り上げたり、さまざまな工夫をしています」と、理事長の野村さんは話す。

さらに、平成23年度には居宅介護事業、平成25年度には放課後児童等デイサービスを開始、障害福祉事業を中心に、地域のなかで活動を展開している。

大成会の基本理念
障害者の人権尊重と地域福祉の推進をめざして

大成会では、次の4点を基本理念に掲げている。

- ●人権の尊重と良質な福祉サービスの提供
- ●総合的な福祉サービスの提供
- ●地域福祉の推進
- ●将来を担う福祉人材の育成

この基本理念のもと、障害福祉の専門性を活かした多彩な活動を展開している。

「現在、大成会の事業を利用されている方の高齢化が進んでいる傾向にあります。ほとんどの方が家族とご自宅で生活していますが、親御さんたちは、自分がいなくなった後のことを大変心配されています。社会福祉法人として、障害のある方が安心して暮らせる地域をつくる、親亡き後の生活を支えるということが求められていると考えています。

将来的に、障害のある方と、高齢になった親御さんが一緒に安心して暮らせる環境がつくれたらと思っています」と、理事長の野村さんは、法人の理念と展望を話された。